

外国人児童生徒教育における母語支援員の役割  
—母語支援員・日本語指導担当教員・管理職へのインタビュー調査から—

古川 敦子 (大阪教育大学)

1. はじめに —本研究の目的—

本研究は外国人児童生徒の在籍校の母語支援員が教育現場で果たしている役割と意義を明らかにすることを目的とする。母語支援員とは外国人児童生徒の母語が堪能な支援員であり、学校で教員とともに児童生徒の学校生活の支援を担っている。日本語学習支援の他、母語を活かして通訳や翻訳などの言語的支援を行っており、教育現場に欠かせない存在となっていると考えられる。

現在、日本語指導の質の向上が強く求められており、文化庁(2018)や日本語教育学会(2018)で指導者の資質・能力、および研修で学ぶべき内容が示される等、関連の調査研究は進みつつある。しかし支援員に関する調査研究はまだ十分とは言えない。児童生徒の母語の使用に関しては、在籍学級において母語を活用した学習支援(馬場 2016 等)や、母語支援者と日本語支援者の協働による先行学習の連携(清田・朱 2005)等の研究がなされているが、母語支援員が学校現場でどのような役割を担っているか、それらに関係者はどのように認識しているかについては、明らかになっていない。本研究では、外国人児童生徒教育に関わる複数の指導者へのインタビュー調査と、実際の日本語指導場面の参与観察から母語支援員が学校で行っている役割と、求められている力について考察した。

2. 調査概要

本研究の調査対象地域は、群馬県内で外国人住民の割合が高い3地域である。これらの地域は南米諸国の出身者に加え、最近ではフィリピンやベトナムなどのアジア諸国、そしてイスラム圏の出身者も増加しており、ますます文化や言語の多様化が進んでいる。

本研究のインタビュー調査は、この3地域の小中学校に勤務する母語支援員(日本語以外を母語とする)、日本語指導担当教員、管理職(校長、教頭、指導主事等)を対象に実施した。調査協力者は表1の通りである。

表1 調査協力者

	人数	現在の勤務状況
母語支援員	12人	小学校4人、中学校5人、小中学校勤務(巡回指導)2人
日本語指導担当教員	6人	小学校4人、中学校1人、元教員(現ボランティア・小中学校の日本語指導担当経験あり)1名
管理職	4人	小学校校長1名、小学校教頭1名(指導主事経験有)、指導主事1名、教育委員会所属コーディネーター1名(元小学校校長)

調査は半構造化インタビューで行われ、「学校内で母語支援員の果たしている役割」「母語支援員に求められる力」の2点を中心に、それぞれの立場における認識について質問した。本稿ではインタビュー調査の結果に加え、学習支援場面(中学校1校、小学校3校、校外の日本語学習支

援の場1つ)の参与観察の記録を参考にし、上記2点に関わる内容を抽出してまとめる。

### 3. 考察 —それぞれの立場から見た母語支援員の役割—

母語支援員は、取り出し指導や入り込み指導において児童生徒の状況に応じて母語を用いた学習支援を行っているが、その他に家庭訪問・二者(三者)面談での通訳や、学校からの通知の翻訳等、学校・教員・保護者・子ども間での言語的支援も主要な業務となっていた。

管理職や日本語指導担当教員からは、外国人保護者との対応に関する役割が非常に高く評価されている。例えば子ども同士のトラブル等、異文化摩擦やコミュニケーション不足による問題において、双方の文化的背景も視野に入れつつ、学校の文脈に即して補足しながら伝える役割が期待されていた。特に管理職の立場からは「保護者からの信頼」「子どもと寄り添う姿勢」「協働性」などが挙げられ、地域社会との関係構築や、調整力が求められていることが分かった。

日本語指導担当教員からは、母語支援員が単なる言語的補助ではなく、「児童生徒が安心して学校生活を送れるような環境を整えること」「普段の子どもの様子をよく理解したうえで、わからないことをかみ砕いて説明できること」などの役割が求められていた。また、児童生徒の問題に「カウンセリングマインド」をもって対応できることという意見も見られた。

母語支援員は、校内の教員や他の支援員との連携・協働への留意、日本人の教員や児童生徒には意識されないような学校文化の説明などを重視している。その他に、児童生徒や保護者から日本での生活や将来の進路に関する様々な相談が母語で寄せられており、「外国から来日した者」同士、「日本語学習者」同士としての存在が校内にいることの意義が語られた。母語支援員自身は、時に勤務時間外にも及ぶその相談対応を非常に重視していることが分かった。

### 4. まとめと今後の課題

今回調査した3地域の関係者からは、学校教育の現場において母語支援員は、学習支援、通訳・翻訳等の言語的支援の他、「児童生徒と学校・教員・保護者をつなぐ」「異なる文化・言語背景による不安を軽減する」という点において重要、かつ多様な役割を担っていることが示された。しかしながら、今回調査した地域では、このような母語支援員の力を育成するための十分な研修は行われておらず、現状では支援員個人の熱意や力量に任されている。多言語・多文化を理解する母語支援員の力を有効に活かし、外国人児童生徒教育の充実へつなげるために、今後は、母語支援員の持つ知見の蓄積と共有化、組織的な育成が重要な課題になるだろう。

.....

付記 本研究は公益財団法人日本教育公務員弘済会より平成30年度日教弘本部奨励金の助成を受けて行いました。本研究の調査・授業見学等にご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

#### 【参考文献】

- 清田淳子・朱桂栄(2005)「両言語リテラシー獲得をどう支援するか—第一言語の力が不十分な子どもの場合」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究』1、P.44-P.66
- 馬場裕子(2016)「公立小学校における在籍学級での二言語併用授業—外国人児童の包摂と多文化共生教育の可能性—」『Core Ethics』12、pp.287-302
- 日本語教育学会(2018)『外国人児童生徒等を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業—報告書—』
- 文化庁文化審議会国語分科会(2018)『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)』